

食卓をめぐる変奏

——『脂肪の塊』の人物描写に関する一考察——

北 川 美 香

はじめに

食事は本来、生物の個体維持に欠かせない生理的欲求を満たす本能的行動である。しかし、人間はそこに様々な価値を付加して社会的行動へと発達させてきた。動物とは異なり、人間は原則的に「共食」する——複数の人間で食卓を囲む——のもその一例である。摂食行動という外敵からの攻撃に無防備になる場面を他人と共有することで、集団への帰属意識を強化させるのである。そこから、同席者との摩擦を解消し円滑に共食を進めるためのマナーが生まれていった。上流階級では正餐がつねに儀式性を帯びるなど共食は数々の意味を担わされるに至る¹⁾。

モーパッサン作品での「食」の重要性についてはすでに拙論で指摘している²⁾が、共食が果たす機能も無視することはできない。まず目につくのは、未知の人々が食卓をともにすることをきっかけに新しい人間関係——特に男女間の性的関係——を結ぶという物語展開が頻出する点である。そもそも食事をともにすることで見知らぬ人間同士の距離が縮まり、親近感が高まるのは何も恋愛関係に限ったことではない。現代のビジネスランチもこの範疇に含まれるだろう。しかしながら、食欲と性欲をしばしば平行して考察するモーパッサン作品においては、とりわけ恋愛感情が突出して見られる³⁾。たとえば、『29号寝台』*Le lit 29* (1884) では美男の軽騎兵士官が女性と晚餐をともにすることがその後ベッドを共有することとイコールになっている。『木靴』*Les Sabots* (1883) の女中は主人と同じ食卓につくよう命令された夜にベッドも共有するよう強いられる。

人間関係を創出する次の段階として、既知の人々による共食がその集団に親和あるいは敵対関係を生み出すことが考えられる。共食することによって集団の成員が否が応でも食卓で顔を合わさねばならないためである。モーパッサン作品に現れる食卓はどちらかと言えば平和な団らんよりも、議論やいさかいの場を提供しがちである。『相続』*L'Héritage* (1884) に現れる子供を作れない亭主は食事の度に妻の罵倒を受ける。『田園悲話』*Aux champs* (1882) でも食卓は若者が親の行動を非難する席になってしまっている。これが発展すると、共食する場が集団内の権力構造を確認する機会を与えることもある。食卓は単に食欲を満たすだけにとどまらず、限りある食物

を分配する場でもあるからだ。したがって、力のない者にとって食卓は生存を賭けた戦いの場になる。『盲人』 *L'Aveugle* (1882) で目の不自由な男を養うのが経済的な負担だと感じた家族は、彼の食べ物を取り上げたり、動物と食物の取り合いを演じさせて男を弄ぶ。『家族』 *Une famille* (1886) の老人も、家族から好物を制限されるいじめに遭う。このように共食の場は作家のペシミズムによって悲劇の舞台となりがちだが、いずれにしろある集団内の人間関係を映し出す絶好のシチュエーションとして利用されている。

本論では『脂肪の塊』 *Boule de suif* (1880) の中で、「共食」つまり食卓を共有する行為がどのように登場人物の関係を照射しているか、その結果共食がいかにこのフィクションを展開・収束させるディナミズムの鍵を握るかを検証してゆく。

1. プロットと連動する食卓描写

『脂肪の塊』では登場人物相互の関係やその移り変わりを映し出す鏡として、食卓が物語を構成する上で欠かすことのできない要素を秘めている。そう推定できる根拠のひとつに、この小説が旅行の過程を物語の推移する場を選んでいることが挙げられる。馬車に乗り合わせた登場人物たちは、目的地に向かうという唯一の共通点しか持ち合わせていない。社会階層も職業も思想・主義も様々であるから、時間の使い方も当然それぞれ異なってくる。しかしながら、いくら異なる事情を抱えていても、生命を維持するために食事だけはしなければならない。それで、食事の場が重要性を帯びてくるわけだ。たとえば、修道女らは近くの教会や修道院へ出かけるのに忙しく、食事時にしか他の登場人物と顔を合わさない「*Les bonnes sœurs, qui ne se montraient qu'aux repas*」(p.107)。食卓のみが全員の顔が揃う機会なのである。おまけに、彼らは旅行途中の宿屋で足止めを食う。目的達成を保留されたうえ、大量の積雪に囲まれた田舎宿に閉じこめられ進退窮まってしまう。このような閉塞状況におかれ、食事の他には大した気晴らしがない。『脂肪の塊』では時間の経過を知らせるように食事のシーンが幾度となく現れる。これら特殊な舞台設定が食卓の意義をいっそう高めている。

『脂肪の塊』における食卓の位置づけ以前に、宿屋の台所を兼ねた広間が人の集散する場として機能しているのが読み取れる。一行が宿に到着した際、まず広い台所に招き入れられる「*On entra dans la vaste cuisine de l'auberge*」(p.99)。翌日、予定出発時刻に全員が馬車に乗り込もうと同じ台所に集まっている「*tout le monde se trouva dans la cuisine*」(p.103)。宿屋に足止めされる理由を取りざたするのも例の台所においてである「*Tout le monde se tenait dans la cuisine, et l'on discutait sans fin, imaginant des choses invraisemblables.*」(p.106)。登場人物の運命がこの台所兼広間を中心にまわっている有様が端的に表されている。

さらに、食卓は同席者のおかれた状況や心象を投影する場になりうる。というのも、共食が食べるだけでなく、話を交わすなど付加的な行動を伴うためである。一行が宿屋に着いて初めての食事は、娼婦がプロシア士官に呼ばれるという予想外の事態で一時驚きに包まれるものの、長旅

の末ようやく宿屋にたどり着いた安堵感を反映して賑やかになっている「le souper fut gai」(p.100)。翌日、出発できないと判明したときは誰もが不安で食も進まない。とりわけ、足止めされる理由を知っている娼婦は内面の激しい動揺を隠せない。

[...] l'on mangea quelque peu, malgré l'inquiétude. Boule de suif semblait malade et prodigieusement troublée. (p.105)

プロシア士官の目的が娼婦に肉体を提供させることだと明確になって、誰もが逆上した後の食事はどうか。

On dîna néanmoins lorsque la première fureur fut apaisée; mais on parla peu, on songeait. (p.107)

社交辞令を交わす余裕もなく、それぞれ善後策の練り上げに耽っているのだろう。その翌朝、やはり出発できないと分かった食事の席はわびしい「Le déjeuner fut bien triste」(p.108)。その日の夕食も無言のままにすぐ終わってしまう「Le dîner silencieux dura peu」(p.109)。ついで、娼婦がプロシア士官の要求をはねつけ続けると、食卓は娼婦を説得する場となる。娼婦が士官に屈服する決心を固めるのを期待する段階においては、不用意な発言を避けるかのように昼食は静かに過ぎる「Le déjeuner fut tranquille. On donnait à la graine semée la veille le temps de germer et de pousser ses fruits.」(p.114)。最後に食卓は娼婦の妥協を祝う席になる。

つまり、共食の場は登場人物の喜怒哀楽を映し出し、彼らのおかれた状況を投影する場としての役目を与えられている。筋はつねに食卓をめぐる進んでいくのが、この小説の特徴と理解される。それでは、共食行為がどのように物語の展開に強力な作用を及ぼしていくのか具体的に検証してみよう。

2. 社会的相違をなし崩しにする「共食」

偶然馬車に乗り合わせた多様な背景を持つ乗客らが娼婦の食料を分け合う冒頭部の描写が、異なる社会階層間の交流を意味するとしばしば研究者に指摘されてきた⁴⁾。ところが、社会的に相異なる人々が食卓で交流し、結び付きを深める例はこれにとどまらない。

それ以前のプロシア軍駐留を描写する箇所ですでにいくつも確認できる。プロシア軍が駐留してきたルーアンの町で、占領者が恐怖の念を持って恐れられていたのはほんのしばらくにすぎない。国家間の政治的意図がどうであれ、ルーアン市民にとっての占領とは共同生活を意味し、その中でもとりわけ共食に集約されるとモーパッサンは描いている。施政者でなく生活者の立場から見れば、生活をともにすることは当然食卓をともにすることとも言い換えられるのだろう。ルー

アンに占領の一報が入ると、兵士の割り当ては彼らを食べさせる義務と解釈され、プロシア兵が町に侵入したとたん、食べ物の味が変わったと感じられる。しばらくすると、占領者を迎え入れた大抵の家庭でプロシア士官が家族と同じ食卓に座っている「*l'officier prussien mangeait à table*」(p.85)。客としての特別扱いでなく、家族の一員としてもてなされていることの現れだろう。一緒に食事をしていると、自然に話も進んでするようになり、プロシア人の方も暖炉を囲んでの団らんに夜毎つい腰が長くなっていく。プロシア士官が、世話になっているフランス人に同情して、母国の敗戦を慰めることもある。また逆に、占領されたフランス人側が勝利者であるプロシア人の機嫌を損なわないように追従を言うこともある。いずれにしろ、敵味方の対立を越えた会話が成立してくる。他人の目がある家の外ではお互いに知らん顔を決め込んでいても、一旦家に入れば占領者と被占領者が仲良く振る舞う姿がうかがえる。生活基盤の象徴・団らんの中心となる食卓が、相反する立場にあるものの交流を促している。そもそも、フランスやプロシアといった国籍・人種の違いに関わらず、誰でも空腹を避けては通れない。食欲は人類共通の欲求で国境はない事実を示すように、『脂肪の塊』でフランス農民はプロシア兵でもフランス兵でも腹を空かしていたら略奪しに来ると警戒を怠らない。

このように、食べ物を共有することがコミュニケーションの活性化を促進し、その結果集団への帰属意識を触発する記述は、娼婦とその他の乗客に関しても見受けられる。彼女の食べ物を分け与えられた貴族やブルジョワは、食べるだけ食べて何も言わない訳にもいかぬと、まったく階級の異なる女と口をきき始める。会話が盛り上がるうちに、女の愛国心・ボナパルティズムが明らかになる。彼女の思想・主義が体制側の共感を呼び、集団の連帯意識が徐々に高まる。貴族とブルジョワの夫人は自分たちと見解が酷似していると感じて、娼婦に惹きつけられ「*attirées vers cette prostituée pleine de dignité, dont les sentiments ressemblaient si fort aux leurs*」(p.97)、大ブルジョワ夫人は娼婦に懷炉を貸す。食物を共有したことで普段なら交流するはずもない人間同士が理解を深めた経緯をモーパッサンは表している。ただし食物が取り持つ縁でしかなかったため、食事が終わると会話はトーンダウンしてしまう「*La conversation continua quelque temps, un peu refroidie néanmoins depuis qu'on avait fini de manger*」(p.97)。「良識」ある人々の偽善的な態度に対する作者の痛烈な皮肉が感じられる。

他にも、モーパッサンはプロシア人とフランス人の共食場面を数多く用意している。いくつか例を挙げてみよう。宿屋に駐留するプロシア兵は偶然同宿したフランス人馬丁とカフェで仲良さそうに「*fraternellement*」(p.104)一杯やっている。田舎の家では、占領している兵士がフランス人農婦に命令されて、じゃがいもの皮を剥いたり、スープやコーヒーの用意に汗を流す。勝者と敗者という立場を考慮すれば、本来ならば憎み合うのが当然かもしれない。実際、モーパッサンは登場人物の一人である伯爵にこの光景を目にして驚かせ、共和主義者に腹を立てさせている。そういう常識が存在することを作者が認めながら、あえて覆そうと試みたのはなぜだろう。生活とりわけ食事をともにすることが、人々の間に社会が作り出した人為的な違いを消去してしまう本質的な力を持つと強調する意図が働いたからではなかろうか。通常なら反発したり敵対してもおかしくない者同士が、共食で感情的な対立意識を極めて希薄にしてしまう例はモーパッサンの

他作品でも珍しくない。もっとも典型的な例は、監獄の料理人らと食事をするうちに打ち解けてしまう『死刑囚』*Le Condamné à mort* (1883) の囚人である。法や制度を遵守していくためには立場上げっして馴れ合ってはいけな者たちが食事をもにすることで接近してしまう展開が巧妙に描かれている。

また、共食とは呼べないが、時間をおいて同じ場所で飲食行為を行っているために同質性を結論づけられる事例も『脂肪の塊』には存在する。

Du reste, les officiers de hussards bleus, qui traînaient avec arrogance leurs grands outils de mort sur le pavé, ne semblaient pas avoir pour les simples citoyens énormément plus de mépris que les officiers de chasseurs, qui, l'année d'avant, buvaient aux mêmes cafés. (p.86)

カフェが両者を接近させ、敵味方の差異を無に帰している。肌の色や背格好など外観は違っても、飲食行為は万国共通の普遍的な行動という意識がかいま見える。この共通項が国籍・身分・階級の異なる人間をいつの間にか結び付けてゆくのである。しかしながら、モーパッサンが共食に託した役目は普遍性だけではない。共食する集団内での交流を盛んにする一方で、集団から距離を置いて一線を画する位置づけを編み出した。

3. 共食集団からの分離

共食集団からの距離を取る点でも、旅行中という特殊な舞台設定が大きな効果を上げている。旅行とは切り離せない存在である宿屋、そして宿屋を経営する亭主には、ある際だった性格付けが歴史的に施されてきたからである。宿屋というのは一般的に古くから雑多な人間が一堂に会する混沌とした場であった⁵⁾。そのうえ、宿屋は素性の知れない者がトラブルを起こすだけでなく、犯罪の温床となることも多く、旅人の金品ときには命さえもが狙われた⁶⁾。「宿屋の主人は悪党と思え」とことわざに言われるように、亭主には胡散臭い商売という有り難くないレッテルが貼られていたらしい。

そもそもこの仕事を他の稼業と区別する本質的な特徴は、客との個人的な営利行動と公序良俗の監視機能との関係の狭間にあって、まことに微妙な位置を占めていたことだ。コミュニケーションセンターの中心人物として、亭主は出入りする連中が取りざたすることを知り尽くしていた。それが国家に背くものかどうかを知ろうと、当局は亭主に密告を促したという。そのような制約のもとで、亭主は必然的に客と衝突する羽目になった。当局にも客にも喧嘩を売らないためには、亭主は政治に無関心な振りをするしかなかったが、この態度がたちまち得体の知れない人間という悪評をもたらした⁷⁾。

さらに付け加えるならば、宿屋は昔から売春を容認あるいは奨励することが少なくなかった。

これも亭主の評判を貶める要因となる。つまり、宿屋の亭主は経営者であると同時に、犯罪者・売春の仲介者・体制側への密告者になる可能性もある要注意人物として世間の目に映っていたのである。

モーパッサンは好んで宿屋の主人を一筋縄でいかない人物として語っている。いくつか具体例を挙げれば、『ポールの恋人』*La Femme de Paul* (1881) の舞台となるレストラン兼ホテルの亭主は商売に明るく、店に有利なことならば倫理面で多少の問題があっても平然と押し進める。『ひも』*La Ficelle* (1883) で同じく宿屋とレストランを経営する主人は、抜け目のない小金をためた男と描かれている。『小さな樽』*Le Petit Fût* (1884) に現れる宿屋の主人は、老女の財産を奪うために酒を覚えさせて死に至らしめるしたたか者である。いずれの場合も儲けのためには平気で悪魔に魂を売り渡すような亭主像が前提にされている。

『脂肪の塊』に登場する宿屋には、戦時ということもあり、貴族から娼婦まで様々な社会階層の人間が宿泊し、テーブルをともにしている。フォランヴィ亭主のいびきが建物に響き渡る挿話から、フォランヴィ夫婦も同じ建物で寝ていることが読みとれるが、はたして食事の方はどうか。フランス人一行が到着した直後の食事風景では、夫婦は客人と少し離れた場で一応共食している。食卓の端で食べている両者の姿が見られる「*M. et Mme Follenvie dinaient tout au bout de la table.*」(p.101)。この記述により、モーパッサンは「共食」と「個食」の境界線上に亭主夫婦を配置したのではないだろうか。その席でフォランヴィ夫人がプロシア兵をさんざん罵倒し、戦争の無意味さを嘆く。主人はそれを何度も制止しようとするが無駄であった。ところがこの食事以降、なぜかフォランヴィ夫妻は宿泊客と食事をとみにしない。1回目の食事では挨拶代わりに同席したのだろうか。それとも、共食することでついつい口が滑って、フランス人に肩入れしてしまい、占領者であるプロシア兵の反感を買うのを亭主が恐れたのだろうか。最初は食卓の端に座らせ、次に食卓から抹消した作家の配慮は亭主夫婦の微妙な立場を忠実に反映すると思われる。共食しているフランス人、2階で「個食」しているプロシア士官のいずれの側にも加担してはならないのである。

この立場を利用して、モーパッサンは亭主に「仲介者⁸⁾」としての機能を遺憾なく発揮させる。宿に同宿しながらけっしてこの食事の場に顔を出さないプロシア士官と、共食しているフランス人一行の間を取り持つのはつねにフォランヴィである。一行が宿に到着した直後、全員が食卓に着こうとすると、士官からの命令で亭主が娼婦を呼びに来る。彼一人が士官のメッセージを伝える権利を有しているからだ。逆に、フォランヴィだけが民間の用件で士官に話す権限を与えられていた「*M. Follenvie seul était autorisé à lui [l'officier allemand] parler pour les affaires civiles.*」(p.104)。後になって、娼婦だけを宿に残して、他の人は解放してほしいという乗客の願いを士官に届けに行くのも亭主である「*M. Follenvie se chargea encore de la commission*」(p.110)。フランス人一行の足止めもフォランヴィが士官に指示されたことなので、伯爵といえども同じ屋根の下にいながら直接士官に問いただしに行けない。朝寝坊のフォランヴィが目覚ますのを手をこまねいて待つしかない。宿の規律を支配しているのは社会的地位が低くてもフォランヴィであることが推し量られる。その後も、食卓にいる娼婦にフォランヴィが幾度となく士

官の要求を伝えにくる。到着翌日の夕食時、一行が食卓に着こうとすると「Comme on allait se mettre à table」(p.107)、フォランヴィが士官のメッセージを伝えに再び現れる。第3日目の夕食でもスープが出ると、フォランヴィが例のごとく出てきて例の文句を繰り返す「Au moment où l'on servit le potage, M. Follenvie reparut, répétant sa phrase de la veille」(p.112)。フォランヴィが娼婦の個室でなく、全員が顔を揃える食卓へ必ずメッセージを伝えに来るのも興味深い。モーパッサンは意識的に共食の場を利用している。すなわち、フランス人一行が一種の運命共同体となり、娼婦の行動ひとつに全員の今後がかかっていることを暗に示している。

もう一つ見逃してならないのはメッセージを伝えに来る亭主の態度である。彼は毎回何もコメントせず、中立の立場を貫いている。プロシア士官に対する娼婦の激しい怒りを前にしてもまったく反応を示さない。彼のボーカークフェースぶりは意図的に与えられた特徴と理解される。その根拠を列举してみよう。宿泊客から宿屋に足止めされる理由を尋ねられたとき、亭主は士官のメッセージをまったく同じように繰り返すだけで、何の説明も加えなかった。

[...] il ne put que répéter deux ou trois fois, sans une variante, ces paroles :
 « L'officier m'a dit comme ça : "Monsieur Follenvie, vous défendrez qu'on attelle demain la voiture de ces voyageurs. Je ne veux pas qu'ils partent sans mon ordre. Vous entendez. Ça suffit." » (p.105)

士官の言葉をそのまま直接話法で伝達することで、うっかり言質を取られないように気をつける注意深さが認められる。また、士官の難題を引っ込ませるいい方法をかき出そうという下心で、旅行者はフォランヴィをカード遊びに誘う。亭主を自分たちの仲間に引き入れようとたくらんだ訳だが、結局この男からは何一つ聞き出すことができなかった。フォランヴィの方が一枚役者が上だったということだろう。ついに、娼婦が士官の要求に屈する決心をすると、フォランヴィは一行が集まっている食卓へ来て娼婦抜きで食事を始めるように勧める。「うまくいったのか」と伯爵に問われれば「oui」と最小限の言葉で手短かに答える。不必要に長く話して誤解を招かない配慮である。彼はもちろんその後の祝杯には加わらないが、「この宿にシャンペンがあればおごってやる」という客の言葉は聞き逃さず、シャンペンを4本も持ってくる抜け目のなさを発揮する。プロシア士官を非難するのでも、娼婦を陥れたフランス人一行に憤慨するのでもない。彼はいたって冷静で、傍観者の姿勢を崩さない。

今まで見てきたように、宿屋の食卓はフランス人一行の感情の起伏を映し出し、彼らが結束する場になっているので、亭主は必要以上に近づこうとしない。プロシア士官ともフランス人旅行者とも衝突を避け、二重性を生きるよう義務づけられた職業上の要請によるのであろう。共食場面との距離は、両者から一定の距離を置いた第3の地位を示唆しているのではなかろうか。

4. 分離した共食空間

最終的に、馬車内で展開する最後の食事場面において、全ての人間が一つの食卓を囲む状況は消失する。それぞれが懐具合・腹具合に応じて自分用の弁当を用意している。路傍にいる鳩さえも、自らの境遇に釣り合わせて馬の糞をついばんでいる。しかし、この場面は完全な「個食」には分割されていない。貴族と大ブルジョワ夫婦・プチブル夫婦・修道女・共和主義者の4グループに共食する空間が細分化して再編成されている。ここで興味深いのは、貴族対ブルジョワという分け方や、各夫婦ごとという分類がされるのではなく、大ブルジョワとプチブルの間で亀裂が入っていることである。なぜこのような分類方法が選択されたのだろうか。

その理由を説明するために、馬車内での2度の食事風景に見られる作法の相違に着目してみよう。結末部、プチブル夫人がまず仔牛の肉を取り出して、夫と自分のために薄く切り分ける。

Alors sa femme atteignit un paquet ficelé d'où elle fit sortir un morceau de veau froid. Elle le découpa proprement par tranches minces et fermes, et tous deux se mirent à manger. (p.119)

貴族らはメインディッシュに肉のパテ、修道女はソーセージ、革命家は卵とパンでそれぞれ静かに整然と食事を進める「tous ces gens qui mangeaient placidement」(p.119)。何の混乱も動揺も認められない。娼婦が最初に用意していた弁当の鶏に他の乗客が食らいつく姿と比べれば、食事マナーの変化は歴然としている。冒頭部でプチブルはチキンをナイフの先に突き刺し、歯でかみ切ってむさぼり食っていた「sur la pointe d'un couteau toujours logé dans sa poche, il enleva une cuisse toute vernie de gelée, la dépeça des dents, puis la mâcha avec une satisfaction si évidente qu'il y eut dans la voiture un grand soupir de détresse」(p.94)。ナイフを食品に突き刺して食べるのは下層階級のマナーとして当時から非難されている⁹⁾。他の者も頬ばり、噛み、飲みこみ、死にものぐるいで食べている「Les bouches s'ouvraient et se fermaient sans cesse, avalaient, mastiquaient, engloutissaient férocelement」(p.94)。どちらの引用でも動詞が列挙され、おまけにどの動詞も上品とは呼べない動作を示している。咀嚼嚥下行為があらさまに表されているからだ。感情の表出を包み隠そうとする意図も働いていない。本能の赴くままに格好などがまっていられない切迫した心情が如実に感じられる。他にも「激しい食欲「le violent besoin de manger」(p.93)」や「あふれる唾液「une salive abondante」(p.94)」など欲求を直接的に生々しく描き出した表現が目につく。この表現法は、狩猟民族が自ら倒した獲物を屠って肉を捌きむしゃぶりつくもっとも手を加えない原始的な食事スタイルを彷彿とさせる。

ところが、調理の遂行度という点から考えれば、貴族らが再度馬車に乗り込む際に用意したパテは反対の極にある。ウサギの肉はすり身にされて、焼かれている「un lièvre en pâté gît au-dessous」。他にもいろいろな肉が細かく刻んで混ぜられている「mêlée à d'autres viandes

hachées fin » (p.119)。いずれも原形を保っていない。歴史的に見て、食材からの乖離が上品さを高めると解釈されてきた。たとえば、17世紀フランスのプレジューズはピュレとムースを洗練された料理ともてはやした。噛むことは品性に欠け、散文的な印象を与えるという理由による。生理的機能の否定、すなわちものを噛むこと、食べ物への身体の間わりを抑制し、調理場という無意識の場に野蛮さを追いやろうとしたのである¹⁰⁾。18世紀初頭に至っても少なくともフランスではこの傾向が続き、ものを咀嚼するのは卑しい行為と回避される奇妙な風習が上流階級に広まった。ある公爵夫人は食品を何でもゼリー状にさせたという¹¹⁾。過度に食品を加工する姿勢には、自然に対する人間の制度の優勢を確立する意思が見え隠れする。ブルジョワはおびただしく食品を変形し、その結果自然を文化で征服したと感じていた¹²⁾。さらに、調理場で行う処理が増えれば増えるほど、食事は洗練されて感じられたのだろう。19世紀半ばには、ブルジョワのアパルトマンではもはや台所は家庭の中心でなく、廊下の奥に追いやられていた¹³⁾。そして、食事の場で行う行為が減少するにつれて、食事が本来持つ残虐性が薄まってゆく。

とりわけ畜肉の場合、変形・加工の度合いが高まれば、犠牲となった動物の姿を連想しにくくなるのでなおさらである。畜肉を調理するとは、動物の殺戮および死体の変形に他ならないのだから。実は、調理器具の秘める野蛮な攻撃性をモーパッサンは小説の冒頭部で触れ、伏線にしている。ルーアン市民は調理器具が武器と勘違いされてプロシア軍にとがめられるのを恐れている「*tremblant qu'on ne considérât comme une arme leurs broches à rôtir ou leurs grands couteaux de cuisine* » (p.84)。ナイフの持つ好戦性は古くから論じられてきたテーマで¹⁴⁾、調理器具は本来武器に匹敵する力を宿している。モーパッサンは物語の非常に早い段階から、調理の持つ暴力的な側面を文中に潜ませているのである。

こう考えれば、もも肉にナイフを突き刺して歯でかみ切るよりは、食べる前に切り分ける方が、そして調理段階であらかじめ細かく刻んでおく方がより文化度は高くなる。つまり、畜肉の料理法から判断すると、塊肉を用意した娼婦、食卓で肉を薄く切ったブチブル、すでに肉を細かく処理していた貴族と大ブルジョワは洗練度の面で下から3層に積み重なっている。肉の調理法が社会階層間の差異を描き出す象徴的な手がかりとなっているのだ。

さらに付け加えるなら、貴族たちの食べ物に凝った器に入っている点も見逃せない。

C'était, dans un de ces vases allongés dont le couvercle porte un lièvre en faïence, pour indiquer qu'un lièvre en pâté gît au-dessous [...]. (p.119)

ただひもでからげた包みに入れたブチブルや紙に包んでいる修道女、はてはむき出しでポケットの中に食品を携帯している共和主義者よりも、文化的配慮を行き届かせる精神の細やかさが感じられる。ここで入れ物は単に食品を保存する実際の役割だけでなく、中身を装飾・象徴し、目を楽しませる余剰の目的を兼ね備えた芸術品に進化している。料理を完成に導く過程で、味の探求にとどまらず、美しい盛りつけや凝った料理名といった付加的な要素にまで気が配られている。そう考えれば、貴族たちの持参したチーズに新聞の字がべったりと映っている「*Un beau carré*

de gruyère, apporté dans un journal, gardait imprimé : « faits divers » sur sa pâte onctueuse. » (p.119) のは彼らの識字力ひいては教養を暗示しているのかもしれない¹⁵⁾。

以上のように文化的レベルで対等に描かれる貴族と大ブルジョワの間の境界は、この作品では不鮮明なままである。なぜなら、貴族の夫人に納まっている女性はもともと取るに足りない船主の娘であったと設定されている。元来、貴族とブルジョワの差は無為と労働、換言すれば資本家と労働者であった。しかし、土地からの地代だけで貴族がやっていけなくなり、ブルジョワが資産を増やしたこともあって、19世紀後半に両者の差は徐々に縮まっていた。『脂肪の塊』に登場する伯爵も投機や商売に手を染めているようにうかがえる。金の話に異常なほど関心を寄せると描かれているからだ。金は上流社会を構成しているあらゆる階層が合う合流点と言われ、大貴族が金のため成金階級と商談・縁談を結ぶのも珍しくなかった¹⁶⁾。そのうえ、『脂肪の塊』で階級の最上段に座す伯爵が古い家柄といっても夫人の不貞のおかげで得た爵位であるとモーパッサンは皮肉たっぷりに語っている。

では、プチブルのロワゾーはどうか。彼は番頭から身を起こし、いかさま商売で儲けている成り上がりである。まだまだ、金儲けに奔走するばかりで、精神的な余裕がないと読める。その証拠に、小説内には貴族や大ブルジョワとの違いがいくつも数えられる。第1に、前者2人は議員だが、ロワゾーには政治活動をする暇はない。宿屋で足止めを食っている間にもロワゾーは暇つぶしにワインの売り込みに出かけるが、あとの2人は政治についての議論を始める。第2に、貴族と大ブルジョワ夫人はサロンを開くなど社交に力を注ぎ、個人生活を享受しているが、ロワゾー夫人は家業の手伝いに追われている。彼女がいくら決断力に富み、やりくり上手でも、結局は夫の仕事の補完的な役割を果たしているに過ぎない。伯爵夫人らは娼婦に対しても愛想を振りまくのがうまく、平気で二枚舌を使い、汚い感情を覆い隠す術を知っている。一方、ロワゾー夫人はもっと単細胞で、娼婦に対して露骨に嫌な顔を向け、賤民根性からつい悪口を並べてしまう。彼女にはまだまだ社交上の戦略が身についていない。モーパッサンが両者に使い分けた語群を見れば、その対照性は明白である (« un grand savoir-vivre » (p.96), « duplicités des salons » (p.111) に対する « le tempérament populacier » (p.110), « la pensée brutalement exprimée » (p.111))。第3に、ロワゾーは目先の利益のためには見得など張らない。登場人物のなかで彼だけがこの戦争でワインを売って儲けている。ロワゾーは現在貧富の階段を上っている最中で、保守的になって現状を維持するより、冒険しても打って出ることを優先するからである。そのためカード遊びをすれば、いかさまを働き、馬車のなかでも抜け目なく一番奥の最上席を占めている。上に述べたような政治性・社会性・保守性の欠如によって、ロワゾー夫妻は最後の場面で貴族と共食できなくなってしまう。共食空間の分離が起こる必然性を与えるために、モーパッサンは物語の冒頭から着々と布石を打っていたのである。

おわりに

以上の分析から「共食」——共有される食卓——は異なった階層の人々を結び付けて、新たな関係を生じさせる一方で、共有されない人間との対立や相違を明確にする2つの役割を担っている。一時は食卓の共有によって融和するかに見えた異なる階級・身分の人々は分断・再構成された共食の階層化によって再びそれぞれの占めるべき位置に戻ってゆく。つまり、物語を展開させた共食の場が、結末では収束・終焉へと導いてゆくのである。このように、モーパッサンがいかに関食をストーリーに劇的な変化を表すための一手法として用いているかが読み取れたと思われる。人間のもっとも本質的な欲求に結び付いた食事の場は、時代社会の固定化された階層性を物語ることを意図したモーパッサンの一戦略であったと言えよう。

注

* 本論中の『脂肪の塊』からの引用はすべて Guy de Maupassant, *Contes et nouvelles I*, Louis Forestier éd., Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1974 による。

- 1) 「共食」の概念については石毛直道氏の論文を参考にさせていただいた（『人類の食文化 第1巻』、味の素食文化センター、1998、p.32）。
- 2) たとえば、北川美香「『脂肪の塊』における食のテーマ——娼婦エリザベットを通して」、『仏文研究』、27号、1996、pp.163-174を参照されたい。
- 3) 「性」と「食」を緊密に関連づけることはもちろんモーパッサンに限ったことではなく、たとえば精神分析の分野で伝統的に行われている。ちなみに『脂肪の塊』でもモーパッサンは比喻によって食事と恋愛を結びつけている「tripotant de l'amour avec la sensualité d'un cuisinier gourmand qui prépare le souper d'un autre」（p.111）。他人の恋愛に介入するのが、料理を用意する快感と通底するという。いずれも感覚を刺激する点が共通しているのだろう。
- 4) Marie-Claire BANCQUART, *Boule de suif et autres contes normands*, Garnier, 1971, XXXIV, Marie DONALDSON-EVANS, *A woman's revenge*, Lexington, French Forum, 1986, p.44, および“The Decline and Fall of Elisabeth Rousset: text and context in Maupassant's *Boule de suif*” in *Australian Journal of French studies*, vol. XVIII, no.1, 1981, p.18. など。
- 5) ウラ・ハイゼ『亭主——酒場と旅館の文化史』、白水社、1996、p.83。
- 6) 同上、p.147。
- 7) 同上、pp.119-120。
- 8) ドナルドソン＝エヴァンスがフォランヴィを「go-between」と呼んだ（“The Decline and fall of Elisabeth Rousset”, *op.cit.*, p.21）のを踏襲している。
- 9) Norbert ELIAS, *La Civilisation des mœurs*, Calmann-Lévy, 1969, p.176。
- 10) エドモン・ネランク、ジャン＝ピエール・プーラン『よくわかるフランス料理の歴史』、同朋舎出版、1994、pp.37-38。
- 11) ケイティ・スチュワート『食と料理の世界史』、学生社、1981、p.129。
- 12) ジャン＝ポール・アロン『食べるフランス史』、人文書院、1985、p.170。

- 13) アントニー・ローリー『美食の歴史』, 創元社, 1996, p.116。
- 14) 山内昶『「食」の歴史人類学』, 人文書院, 1994, pp.108-109。
- 15) 当時, 政論新聞に続いて大衆新聞が発行されていたとはいえ, 新聞はまだ政治色が濃く, 啓蒙的な面が強かった。そのうえ, 小学校が義務教育化するのは1885年以降で, 文盲率が劇的に低下するには20世紀初頭を待たねばならない。
- 16) ルイ・シュヴァリエ『歓楽と犯罪のモンマルトル』, 文芸春秋社, 1986, p.197。

[付記] 本稿は, 文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。